柳小島

泉鏡花作

一

「やあ、旅のお女中。」

湖の面に影の映る、麗なる人に振向いたは、汀に投げ出した捨小舟、青芒のみ處々、四邊に蘆はなけれども、鷺のふんの堆い、舳に釣の絲を垂れて、茫乎浮木を視めて居た、褌ばかりの赤裸で、骨組の逞しい、屈強な漢である。頤を包んで旋毛で留めた、南瓜被といふ奴で、日に焼けた面を仰向け、「もし、お前様、お宗旨は何でがすね。」　と詰るが如くにして尋ねた。

釣する状を、彳んで視めた婦人は、小造ですらりとして、顔は菅笠に隠れたが、結んだ紐にくツきリと、脣の色紅く、緑の黒髪幽にこぼれて、清き頸に鬢の影。薄紫地に花の夕顔、ほの／＼とある半襟で、紺縮緬に白抜の蝶の模様の單衣。野菊を染めた友染の薄い襦袢も涼しげながら、半莫蓙を撫肩に、寂く

窶れた姿容。湖を吹く風そよ／／と、漣渡る膚の雪の、ちらめくばかり媚かしく、恰も翼を交はすやう、白き蝶々の、乳のあたりに、はら／／と動くさへ、旅なれば哀にて、花野に狂ふものに似ず、草枕假寐の夢の、木の葉の衾を迷ひ出でゝ、此處に彷徨ふ風情あり。

白の脚絆に、結附け草履、同一色の足袋、甲かけして、紫の色のやゝ褪せた、風呂敷包を持つた手に、竹の杖をぞ支いたりける。

襟に清らかな布をわがねて、鳩尾に犇と當て、白木の小形の箱をかけたが、巡禮か、六部か、千ケ寺か、いづれ志す廻國の、然せる類のものであらう。

餘り唐突に聞かれたので、婦人は少時答へなかつた。いで岩代に名にし負ふ、磐梯山の裾長く、沙漠の如き原野を曳いて、直に猪苗代に臨む處。其焼山の硫黄の煙、淡く日の光を蔽ひ、濃き影を地に擲つ他に、目に遮るものとては、高き樹の梢もないのに、

羽衣を何の枝にかけて、天降りしや、と疑ふばかり。魚釣は、見上げ、見下し、「えゝ、これ、お前様、何のお宗旨でお在なさるね。」

婦人は少し打傾き、「私の宗旨とおつしやいますか。」「はあ、お前様、」「私は、あの巡禮なんでございます。」と、優しい聲して判然答へた。「巡禮様か。それぢや何だね。普陀落や岸打浪、と遣らかすだね、はあ是だ、」と舷を輕く丁と叩き、「こんな静な凪の日でも、時々だぶりと畝が來るだ、はゝはゝ、岸を打つ浪でがす。其處でお前様唱はつしやる氣か。」

婦人は妙なことをいふと思つたか、ものを問ふやうに返事をする。「否、何ですか、私は別に歌を唱ふのではございませんよ。そして、國々を廻りまして、方々お參詣をしますけれども、別に是と申して、宗旨といつてはないのです。」と、親くものを云ふのであるが、何となく威があつて、その口數が少く聞える。

魚釣は、頬被の中に眉を顰め、「はてね、普陀

落やを遣るでもなし、お宗旨というてはなしか、では何というて拝まつしやるね。」　「はい、法華宗のお寺なら、妙法蓮華經と念じます。浄土、一向宗、眞宗の寺々では、阿彌陀佛と唱へます。」　「何、南無妙法蓮華經、南無阿彌陀佛、日蓮様と蓮如様を、兩天秤にかけてござるか。これはしたり。」　と額を叩いた。

二

音は發奮まぬ南瓜被、魚釣は變な顔で、「其の様子ぢやお前様、お宗旨は五目だね、時には山伏も遣らつしやるの。」「然うなんでございますよ。」と透通るやうな皓齒が幽、婦人は纔に打微笑む。「ほい、」

と舳に腰を落して、「法蓮華經で、阿彌陀と來て、なむあびらうんけんから、おんなぼきやあべるしやのツ。いや、こりやならぬわ、大變ぢや。」

身もだへをして、周章てる拍子に、船が揺れると、差置いた、釣棹がするりと辷るを、ちやツと壓へ止めて、きよとんとする。

婦人は水紅色の腰帶の、幅の廣いので緊乎と締めた、高端折の裳軽く、草履重げに一歩進み、

「あゝ、貴下、何ぞ宗旨に因りましては、此の邊に、入れない村でもござんすかい。」「何の滅相な、お前様、雨も風も通抜けぢや。吉利支丹でも婆提連でも、そんなことはお構ひなし、お宗旨を聞いたのは、私がそら、恁うやつて、魚をせしめて居るから

だよ。
見さつせえ、日和の所為か、まんが悪いか、朝から未だ一尾もかゝらねえだ。
根が素人の横好で、私釣が下手でがす。道樂にやるんだで、せめてこれ書のお菜に、鰡の一ツも、引掴んで行かねえ分にや、磐梯山に雲はなうても、山の神が暴れるだてね。
鳥差でも然うぢやとね。釣をするも同一ぢや。傍に人が見てござつて、慈悲に題目なり念佛なりを唱へると、雀も、鮒も皆遁げて、針にも棹にも留らぬ、と云ふでねえかね。
猿は庚申様、長蟲は辨天さん、鯰は鹿島大明神、鰡の親分は知らねえで、お題目で遁げをるか、お念佛は利かねえだ。念佛で遁げをるか、題目は效用がねえで、何方へ外れて、何が釣れねえとも限らねえだが、お前様のやうに、八宗兼帶、なむあびらうんけんから、べろしやのまで唱られた日にや、當りはづれはねえだからね。間抜けが餌を饗應ひをる、我も來い誰も來いと、大海の鯨まで、此の湖水へ呼び込んで、私をなぶらうも知れねえだ。」
魚釣は又、額を撫でゝ、高く笑ふと、風が吹くや

うに谺へ響いて、山も水も寂冥して、廣野の夏の十二時頃。「其處でお前様に聞いたでがす、やあ、もし、親達か、」　と云ひかけて、風俗を熟々と、「むゝ、許嫁様か、それとも旦那殿か。命日といふでもねえなら、勘辨して大目に見て、殺生戒の呪文などを唱へねえでくらつしやいよ。」

婦人は靜に聞いて居たが、杖とゝもに二歩三歩、斜に、汀を後に退いて、「まあ、飛だ、お妨げになりました。貴下のお邪魔にならうとは、思はなかつたものですから、拝見したのでございます、眞個に氣がつきませんで、心ないことでございましたねえ。」

慇懃に詫ひられて、魚釣は氣の毒さう、「何お前様、唯見ておゐでなさる分には、半日だつて一日だつて構ふことはねえでがすよ。　えゝ、自分の下手を棚へ上げて、惡く勘ぐつて澄みましねえ、はあ、面目なうがす。氣にかけねえで下さいましよ。

而して彼ぢや、何ならお前様些と此方へ入つて、休んで行かつしやつては何うでがすね。

遠慮はねえだよ。岸に附着いた船だけれど、水に浮いて居るだけに心持ばかりでも、づツと風が通つ

て涼しいだ。」

「難有う存じます。否、實は、彼方から、此の岸へついて參りましてね、餘程の間、まるで、人に逢ひませんもんですから、此處に釣をなすつていらつしやるのを見ますと、頻に貴方がお懷しくつて、つい、通り抜けられなくなつたんでございますよ。

三

魚釣は恥ぢたる色あり。立膝に腕組して、全く釣棹に打背き、くるりと此方に向き直つて、「これは早や、懐しがられる人體かい？……よくお前様、獺の化けたのだと思はつしやらねえ。尤も河童だと、脳天の水が干るで、此の日向にや、曝されねえ理屈でがすがね。得て恁ういふ處では、猿ものゝ功經た奴が、人間に見えるもんだで、お前様餘り人懐く、うつかり口なんぞ利いちやなんねえ。」と、太く婦人の風采に動かされたものゝやう、染々と云ふのであつた。「あの、それでは此の邊は恐しい處でございますか。」

魚釣は頭を掉り、「何の、恐くも何ともない、神代のやうな處だがね、那須野ケ原は御存じか、殺生石は一ツでも、墜る鳥は木の葉のやうぢや。釣をする奴は一人だけんど、捕られる魚は幾つだか知れねえ道理で、こんな清浄の湖のあたりでも、一個や半分、厭なものが居ねえとも限らねえだで申すでがす。見りやお前様、大分遠方のお方らしいが、一體是から何處をさして行かつしやりますな。」

旅の婦人は頷く如く、其の笠を打傾け、「今も私が申しました通り、國々を巡禮して、お參詣をして歩行きますが、此の湖水について參りますと、辨天様の御堂があるんでございますツてね、づツと向うの一軒家で、お茶をたべて休みました時、聞きましたものですから、其處へ參るんでございますが、小さな徑は皆な山の方へついて居て、此の岸の砂場は、時々浪が來ますばかり、人通りもありませんから、何だか覺束なくなりました。釣をなさいます貴方を見つけて、一寸伺ひませうと、存じましたけれど、傍見もしずにおゐでゞすから、お邪魔にならうと、控へましたが、却つて惡かつたのでございます。」

魚釣は極惡げに、「些とも惡くはねえでがすて。」

「それでは、是を何處までも參りまして可うございませうね。」「えゝ、づツとおいでなさいまし。何處までもとおつしやつても、最う然う澤山の路ぢやねえだ、それ。」

舷から手を出して、水の上で指した。「彼處に、低い、がこんもりと、黒くなつて松と柳が見えるでがすな。岸が突出て居りますで、水に枝垂れた枝なんざ、手を出しや取れさうな様子でがすが、歩行い

たら十四五町、直ぐに其が柳小島で、お前の行かつしやる、辨天様のお堂の處。・・・・・」

教ふるを笠の下、清い目で打視遣つた、横顔涼しき緑の木立を、五六尺手許へ離れて、フト一羽の白鷺が飛んだやうに、汀を此方へ近寄る者あり。

魚釣は瞳を返して、「おう、旦那どのがござらつしやる。チヨツ、」と内證で舌打した。「貴下、其の厭な人？」「何、はあ、月の輪村の巡査でがすよ。」「然うですね。此の邊は涼いので、眞夏のやうではありませんが、最う、彼の方たちが白い服を着なさるやうになつたんですね。」

望んで仰ぐやうにした。笠のふちに優い手の、白き木綿の手甲も、峯の煙に薄曇。莫蓙をはらりと洩れたる袖の留南奇は失せて、染模様の、蝶の翼も弱々しう、夕顔の花の萎むに似て、故郷遠き姿かな。

魚釣は思はぬ状、棹に片手をかけながら、「いや一寸待たつせえ。」「・・・・・・・・・・・」

杖を此方に向直れば、「これ、今の殺生石だね、妙なことを云ふやうぢやが、途中で浪花ぶしを唸るのを聞かつしやるか、見さつしつたら、遠くから除けさつせえ、氣をつけねえとなんねえだ。」

「えゝ。」と何か言はうとする時、はや靴音が聞えたのである。

四

「木川田、木川田、こら、猪三郎。」　したゝかに巡査に呼ばれて、件の魚釣、棹の絲の伸びたほど、鼻の下を長うして、其の乗つた捨小舟の、右舷より左舷まで、ぐるりとまはつて十八里の、大湖の水の一處、浮木を熟と視めながら、汚れた六尺の結目高に、まともに臀を見せて大胡坐。生緩く引張つて、やう／＼した、けだるい返事。「やあ。」「何が、やあかい。」「やあ　ーー」「何だ、やあだ。」

「や。」「こら木川田ッ。」　「やあ。」　「やあではないが！」と身を揉んで、巡査は反身に、靴を上げて、艫を一ッ蹴つけたが、船も人もびくともせず。　「何だね。」　「えゝ！　き、貴様、其處に何しをるか。」

焦るほど尚ほ落着き、　「釣つてるだよ、見なさる通りだ。其處で騒いぢやなんねえよ。折角寄つた魚が遁げて了ふ、今が肝心の處だよ。」

見返りもせぬので張合はないが、薄い髯を、ぐい／＼引いて、　「魚も釣もあるもんか。貴様、一體、今日は如何なる時であると思ふ、うむ、木川田。木

川田ツ。」　「騒々しい人だ、何だつて、ーー
今日は如何なる時　ーー　されば、十二時下りでゞもあらうかね。」　「何を、誰がき様に時間を聞いたか。」　「刻限を聞くぢやねえのかよ。」
「白癡め、どんな時節だと詰問するんだ、貴様また夏だといふのか。こら、露西亞と戰爭中であるんだぞ。國家の安危の分るゝ處ぢや。うむ、貴様どんな心得で、悠暢な眞似をするのぢやい。」「はツてね、露西亜と戰をして居りや、岩代國は耶摩郡、月輪村の御百姓は、鰡を釣つてはなんねえかね。」
冷にいふを聞きもあへず、一聲叫んで、「黙れ！百姓なら田をたがやせ、暇があつたら肥料桶でも掻廻せ、今此の天下存亡の秋、釣つてる奴が何處にある。然もな、今しがた此地へ知れた、船が二艘沈んだぞ。」「へい、郡山から若松がよひの鐵道が出來てから、餘り蒸汽船は通はねえがね、大業にいはつしやる。それとも漁船でも沈んだかね。それにしちや日和續きだ。湖水の神様にでも魅込まれたかな。」「囈言をつくな、夢ではないぞ、運送船がやられたんだい。」「地體浮いて居るものだでね、時によると沈むでがすて。」「面を洗へ、木川田。貴

様も帝國の臣民ぢや。志があれば釣をして居ても、大砲の音が、此の、水に響いて聞ゆる筈ぢや。對馬の海で、敵艦のために撃沈された。然も我が戰闘員、幾多の將校兵勇が乘つた船だ、蟲の知らせでも分らぬか。」　と洋刀をがちやりと鳴らして、地蹈鞴を踏んだ時、未だ傍を遠く隔てず、見て居た巡禮の旅の婦人は、杖を擧げて、兩手で膝のあたりへ横たへたが、耳を澄ました樣子であつた。

魚釣は少時黙つたが、無言の間に、絲を取直して、するりと向うへ、「そりや敵といへば敵だからね。仇も手向ひもするでねえかな。對手が敵なら此方も敵だ。見さつせえ、頃者中、村方を荒す狂犬だつて、うまく打つかりや退治るだけれど、此方に隙がありや、向う脛だつて、横腹だつて、場所は擇ばねえで喰ひつきます。」

然も呑氣らしくいふのさへ、遊びの片手間で身に沁みない。

巡査は見る／＼色を變へたが、「國、國、國賊。」と怒鳴りつけた。「小平潟は天神樣で、柳小島は辨天樣こくざう樣は柳津だつけ、此處等にやござらねえ。」

今度(こんど)は煙管(きせる)を横啣(よこぐわへ)。

五

「來い。」　と喚いて、巡査は宛然のめるばかりに、いきなり身を壓に脚を踏張り、艫に兩手を、曳！　ぐい、とこじると、小船は堪らず、だぶり左右へ傾いて、附着けたやうな魚釣の臀は、ひよいと持上つて、大く手を支き、　「や、こりやならぬわ、何うするぞいやい。」「此方へ出ろ。」一喝する時、はじめて巡査の姿を見たが、是は！

吃驚した顔色、で、船が揺れたよりは一倍顛倒。

「屯の旦那様でござりますかね。」とぼんとする。

「木川田。」「唯。」「貴様今何と云つた。」「へい。」「へい、ではない、不埒な奴だぞ。き様、國家に對して捨置かれん、怪しからん事を云うたが。」

「えゝ／＼、何を申しましたか、から厄體でござります。今朝から一尾も釣れませぬで、やつきとなりまして、最う掛りさうな處と、一心に氣を取られて居りましたんで、へい／＼。」

巡査は始めて威儀を調へ、背伸するほど、すつく

と立ち、「嘘を吐け、とぼけるな。」「心からの事でございます。」むづ／＼這出しさうに手をつきながら、彳む巡禮を仰いで見つゝ、「唯今も、其處な旅のお方が、此處を通りかゝらつしやつて、優しく見てござつたのに、苦情事をぶつかけて、豪い赤恥を掻きましたばかりな處、いやはや、他愛はござりましねえ。」

巡査も、背後をじろりと見向いて、一入氣を入れて髯を捻り、「むゝ、其では全く、本官であることを知らんぢやつたなツ。」「毛頭虚欺は申しませぬ。へい、地體其の、嬶々めが、釣が大嫌ひでござりまして、喧嘩面に愚圖々々申します處から、なりたけ目につきません遠くへ退いて、恁うやつて、へゝゝゝ、慰むでござります。釣棹も他處へ隱して置きます始末で、旦那が今、いきなり背後からがみ／＼叱らつしやりましたもんだでね。實は其、嬶々の間謀かとも心得ましたから、つい、弱味を見せまい氣で、飛んだ失禮を申しました。」

只管恐入つたる状に、巡査も少く色を直して、「馬鹿め。妻の方が餘程怜悧だ、然もあるべき事だ。些と、時節柄を辨へろ。」「はいはい。」「な、

き様そんな心がけなれはこそ、豫備騎兵で、一度仙臺へ徴發をされながら、刎ね出されて、出征が出來んかつたぢやないか。　こら、閉塞隊の選に洩れたのを無念なりと、血書して願書を出した水兵がある んだぞ。陸軍でも後方勤務にまはされたのを口惜いと、腹を切つた勇士もあるに、き様はな、はい、然やうならで、のめ／＼と歸つて來て、洒亞洒亞釣をしとるは何事かい。　たつた今も申聞かす通りだ。對馬の沖で敵艦が寇をして、非常なる損害を蒙つたんぢや。鐵道でも靜に通るぞ。き様、煙草を吹かしながら、狂犬でも隙があれば、脛へ喰ひつくと吐し居つたが。」「段々恐入つてござります。」「恐入れ、恐入れとも。本官の前で其の頰被は何だ。」

　言の下に、慌てゝ天窓へ手を遣ると、意氣地なくだらりと解ける、手拭をぐしやりと握つて、膝を縮めて踞つた。「第一、き様の其の裸體は何か。」

「是は其の、實は脱ぎましたのでござりまして。」

「こら／＼、又馬鹿にし居るか、許さん！

　裸體はと聞けば、脱いだ、とは何をいふか。」

「旦那お見免しを願ひます、へい、つい、どぎまぎいたしますもんでござりますから、しどろもどろで、

申上げやうが惡うございました、へい。過日私と一緒に、召集をされまして、これは戰地へ向ひました、小坂辰之助の留守のものが、餘り困窮をいたしますにつけて、脱いで遣りましたのでございますわ。」

六

「もし、當事もねえ、私が何も、こんなお金子を頂く法はありましねえだ、飛でもない、措かつしやい。」

「否、こんなお金子とおつしやるほどのものぢやありません。眞にお恥いんですが、是でお襦袢でも召して下さいまし。世間はお互でございます。村から出征をなさいました、小坂さんとやらの留守の方に、貴下が召物をお脱ぎなさいましたと申しますから、私は貴下に、お被せ申したう存じます。」

優容に差寄せた、懐紙の小さな包は、巡査が叱り捨てゝ睨め廻し睨め廻し立去る間に、笠の下で頷いて、手早く拵へたものであつた、爪紅や染めつらむ。

恁くて沖を行く片帆の影に、洋服の色の隠れるのを待つて、船の艫に引返し、手招きして、密と、渡さうとするのであつた。

木川田猪三郎は其の名である。魚釣は打笑ひ、

「はゝゝはゝ、今のをお聞きなさつたゞね、いや、方便と名をつければ、嘘も吐いて見ようもの。

眞似も宜いことは為いというて、何か、身の皮を脱いでまで、人に貢いだというたので、すぐに又お前様の御厚志を頂くだが、それでは冥利が悪いでが

す。

何、此の野郎の様子を見て、大概御推量なされやし、陰徳を施すなんて、そんな氣の利いたのぢやありましねえだ。

鷺が嘴が煩いで、可加減な虚言ウ打つて追拂つたまでゞがす。」

手を掉れば、袖で壓へ、「貴下、嘘でも可いんですよ。」　と落着いて云つて熟と見た。目つきに不思議の品があり、屹と命令をされたやう、辭み難さに俯向いたが、「それぢや恁うしてお呉んなさい。お前様は、これから柳小島へ參詣をなさると云ふで、月の輪村は其の在所ぢや。小坂が内とお尋ねなさると、一番汚え、が直き知れるで、爺様なり、婆様なり、又嫁御なり、同じお施しなさりますなら、其處へお遣し下さりやしよ。

巡査にや、ヅドンと放したゞが、私が裸體も滿更形のない事ぢやねえだがね。一體此の月の輪さ、名は豪え熊だけれど、羊見たやうな痩村で、燒ツ原で、米は出來ずに、當節の茄子なぞも、硫黄が染つたかと思ふほど、木にあるうちから赤ツ茶けて、噛ると燒砂に齒を缺すだ、四國の芋は石になる弘法大師か、

親鸞にでも、崇られたやうな在所でがしてね。
魚が捕れても鯉や鮒ぢや、湖でくらしもならず、然うかと云うて此の節ぢや、鐵道が通じましたで、旅を對手に商も出來ましねえ。
御覽じまし、恁う見た處は宛然大海、眞中ごろは水や空で、見事なは湖ばかり。野山も、人も、骨と皮で、棲めば都といひながら、磐梯山の煙に咽せて、朝夕を送るのが多い中に、小坂が内と來た日にや、話になるのぢやござりましねえ。
老人二人に、嫁、小兒、四人が留守をして、稼人の辰之助といふ悴でがす、豫備で取られて出ましたのは。こりや村での學者でね、小坂の家が旅籠屋で、未だ何うかやつとる時分にや、東京へ勉強に行つて居たゞね。金の都合と、兵役で中途で止して歸りやしたが、野良仕事の畫上りにや、懷中から本を出して、内から土瓶を持つて行く嫁さんと、小松の蔭で覗き合ふ仁體ぢや。それだけでも、こんな邊土に、埋木にするは可惜ものだに、嫁さんが又東京うまれ、素晴しい別嬪でね、何でも書生さんをして居る時分から出來て居て、男が仙臺へ入營すると、其あとを追つて奥州下り、彼處の茶屋で奉公して、三年たて

切(き)つた貞女(ていぢよ)でね。立派(りつぱ)な内(うち)の孃(ぢやう)さんだつていひますが、親許(おやもと)はそれで勘當(かんだう)。」

七

「唯、辰之助の傍に居たいばかりで、お茶屋の二階を勤めたんで、年期はなし、借金はなし、自由の利くことゝいへば、お前様、色男の小兒をこしらへたのに、乳母をつけて、内證で育てさせたといふ權式でね。　それでも金華樓の姉さんで、お縫といへば響いたもので、土地ツ子は申すに及ばず、東京の落武者の藝妓如きがあたり近所へ寄つかれるもんぢやない。一時は松前節と一緒に、唄にまで唄はれて、どんな人の宴會でも、お縫が居ねえぢやなんねえと、不殘金華樓へ持込む騒ぎ。

其癖誰でも男があつて、兒持なのを承知の上だで、今時にや珍らしい、全盛ではありましねえか。

私も仙臺に居たゞがね、何うして音に聞くばかり、金華樓の十町四方で、ほんのり香をかぐばかりで、手の届くやうな花ぢやねえ。

隊は違つちや居ましたが、生れ故郷が同一だで、小坂とは兄弟のやうに交際つて、畜生め、も承知だ

が、どでごんすで色女に、見せるやうな男ぢやねえだよ。

唯辰之助が戸外を通ると、やあ、中將が行く、中將が行く、と恁ういふだ。小隊長殿、大隊長頼まで、内證ぢや小坂中將といはれましたが、一等卒を何為か、と云ふと、業平だといふ洒落でね。なに、こりや男振が佳いぢやねえ、對手が金華樓のお縫だから、それでゞがした。

年季も何にもねえだけれど、親と親が許さねえ、ころび合の中なんで、年寄たちに遠慮して、辰之助が除隊になつて、此の月の輪に歸つた時、一緒には來ねえだつたが、半年ばかり經つてから、高島田でお前様、帶をね、お太鼓といふのに結んで、村の入口で腕車を下りると、大い革鞄を二ツまで、車夫に提げさせて、雪駄をちやら／＼と入つて來たゞが。

いや、押魂消たの、何のぢやねえだよ。

私丁ど、辰之助がね、畠へ肥料をぶツかける處へ通りかゝつて、野良談の最中ぢやつたが、立停つて、小坂さんは、と其の別嬪が聞くでねえかね。

肥料柄杓を、ぼつかり落いて、おゝ、といふと色男、日に焼けた顔を眞赤にして、何しに來た、此處

はお前の來る處ぢやない、と云ふ。是を見せに來ましたツて、抱いて居た子を男に渡すと、すぐに手巾を顔へ當てたあ。　それでも兩親が、と皆聞かず。やあ、辰公、媒的人は爰に居る、と私あ爾時、仙臺座のお芝居を遣つたでがす。　さて、私が先へ立つて、小坂住居となると、一倍芝居ぢや。爺様は先祖の位牌に燈明を上げさつしやる。婆様はお前様氣の毒な目が見えぬ、手をついた花嫁の背後から撫で擦る。辰公土間に立つて茫乎ぢや。　三ツになる男の兒が、ちやんとお辞儀をして、お爺ちやま、お婆ちやまと云つた時は、私思はず泣いたゞね。見たこともない舅たちに、これまで心遣をする、少い阿母の心の裡、こりや貞女だ、と思ふに違はず。

在所では在所なみと、二十三といふ少さに、眉を落して齒を染めたが、發心のはじまりで、力業こそ出來ねえだが、草も取りや水も汲む、舅の肩腰を擦らずに寝た事はない孝行。

其年から痩村だけにも、日和が好うて豊作つゞき、小坂が背戸の眞桑瓜の甘いのも、嫁の徳ぢや、と譽めもので、五月やみでも辰が門に、卯の花の明いのは、何時も月夜ぢやと言ひましたつけよ。

近所のことなり、柳小島の辨天様信心〳〵して、小兒を連れちや雨にも風にも、おまゐりを缺かさず為るだ。鰐口の紐に縋らつしやる、其の窶姿を見るにつけ、可愛い妹が出來さつしたで、辨天様も、嘸御苦勞なさるであらうと、皆いひ居つた事でがす。」

「眞個ですね、」　と身に沁みる。

八

「處が今度の戰爭だね、」

魚釣は煙管を投出し、「親も子も女房も、身體もあつたものぢやねえだ。鐵砲を引擔いで帶革でぎうと腹を緊めりや、がらりと魂が入交つて、彈丸食はうと啼く蟲が、咽喉の邊まで込上げるで、出掛ける本人はお茶の子だてね。辰之助も、蓬つた時泣いたほど別離にや薩張して、召集に應じたゞが、さあ、殘つたものは一期の大事。

立派な稼人が居つてさへ、田地はなし、山は持たず、小作や秣取の合間にや、村の小兒に學校の温習でもしてやつて、蕎麥粉や南瓜のつけ届けを算盤珠に入れるくらゐ、お彼岸の牡丹餅の、大くて鹽の利いた奴、鬼の首でも取つたやうに、振廻はす小兒を見て、情ながつたのも疾の昔、今ぢや兩親が見て喜ぶやうな、食ふや食はずの酷い落目。

例の持つて來た革鞄にや、男へ貢ぐ書生羽織、舅たちへ土産やら、村中への心づけ、自分の衣類も夏冬揃つて、四覆五色とあつたけれど、嫁た翌年から

中氣で寝て居る、舅へ着せたが無くなすはじめで、とゞの了ひにや、針さし兼帶の疊紙に、東京の内を出る時、結つて居た島田にかけた記念だ言うて、大事に入れて置いた手柄まで賣る始末。　こりやもし、熱鹽の湯治に行く、お晴れの丸髷に掛けるというて、村内で評判の、洒落ものゝ嬶々衆がね、文久五ツで買つたゞよ。　こいつは可笑し、襦袢を直した友染の、色の褪せた單衣を着て、小坂の小兒が袖を結へて、水あがきの腕白はいぢらしいが、けゝたいの惡いのは、村長が許の娘だてね。

縮ツ毛の胡坐鼻、大道臼の尻を振つて、お縫さんの紋附を、ぞろりと引摺りは何うでがす。梟が孔雀を殺して、翼を啣へたといふもんだ。　お前様、串戲ぢやねえ、未だ恐いのは其の村長の兀天窓だ。

地體、此處いらにや、賣らうたつて、小袖に羅を買ふものは、掘つても出ねえ。氣前の可い東京育ちだ。先のうち、私が媒的人といふ格で柔いものを一枚、内の嬶々に下し置かれたと思召せさ。

麻の葉木綿の湯卷の上へ、ふはりと引かけたが、とみかうみて、こりやだんぶくろでは納まんねえ、緋の袴を穿かいでは、と眞面目になつて吐いたでね

えかね。
旅費を使うて、若松へ行つて賣るでもないと大概の品物は村長様が引込みました。
其處でお前様、あらうことか、緋縮緬の蹴出しを一枚、兀め、座蒲團に仕立てたゞね、爰へ、ぐにやぐにやと坐り込んで、金函を背後に背負ひの、やあ、床の間の花を活ける、小坂の嫁を呼んで來う。綻が切れたお縫を呼んで、それ、茶を入れろの、途轍もない、三味線弾けのと權柄づけ。粟一升貰ふのも、くらしの助けと、可哀相に、主人のやうに勤めるだが、兀は妾にする氣だから、つけつまはしつ、いや最う、狒々に魅込まれた災難が、辰が留守になると十倍まし、是だけでも痩せるのに。　おまけにお前様、聞かつしやい。お縫さんには男の小姑、辰之助に兄があつて、身上のあら方は此奴が潰した厄介漢。打つ、買ふ、飲む、三拍子揃つた上に、土根性の惡黨で、渾名を蝮の大九郎といふのがあるだ。
内にや居ねえ、前々〳〵勘當ものだがね。義理を立てゝ寄附かぬわけぢやなうて、汚穢しいから踏込まぬばかりさね。其癖間がな透がな、つけまはして、少しでもお錢を見りや、其場で引攫つて跡足で砂とやる。

お縫さんの衣類なども、お為ごかしに、世話をして、大抵上前を刎ねたでがすよ。

大九郎め、此の節ぢや、村長どのゝ手先になつて、頻りにお縫さんを口説くだがね。何、汝も又はじめから狙をつけて、手籠めにしようとまでした事もあるでがすよ。

何處に立つ瀬があるもんだ。」

九

魚釣は思ひ餘つたか、詰めかけむばかりの氣色で云つた。が、巡禮を見て、己を見返り、船と水と山を〓し、掌を、丁と拍つて、「はゝゝはゝ、うつかり實が入つて、飛だ長談話を遣りからかいた。これぢや魚を其方除けで、お前樣を釣つて私が釣込まれたやうなものだね。　さて、何から起つた談だツけ、それ／＼、」　と獨で飲込み、「此の裸體の一件ぢや。今の巡査には、何か、小坂が許の切ないのを見るに見兼ねて、着て居るものを脱いだやうに云ひましたが、何、お前樣、實は借りたものを返したまでだよ。

過日、辰公と一緒に召集されて、仙臺へ行つたでがすが、隊から被服が出ましたでね。最う戰地へ行くばかりだ、と、着の身着のまゝな單衣を一枚。本來は媽々が許へ記念に送る處だけんど、入山形の夜討の揃で、後世に殘るほどのものなら格別。

陣笠首の古着なんぞ、惡く佛壇にでも奉られて、虱を這はしては勿體ねえだで、五合にして飲で了へ、と錢にして酒を買ひ、いや、煽るほどにの。芭蕉ケ

辻へ突立つて、鯨波の聲を上げたは可いがね、もし、隊に人員の都合があつて、私が従軍は後廻しだ。はあ、情ない、と落瞻して、擇屑になりました、と何うして里へ歸られるだ。小包にしてなりと戰地へ連れて行つて下さいとね、逆解斗を打つて願つたけれど、時節を待て、戰爭は三月や半年で濟みはせんと、小隊長殿がおつしやるで、本降の前のぼつ／＼だ。無理に駈出すにもあたらぬかと、さあ、引返すことになつたですが。困つたのは鎧だね。そら、脱いだわ、賣つたわ、飲んだわで、虎の皮の褌こそしねえけれど、鬼の餓鬼が、仙臺下りで生れたやうに、大兒の素裸、従軍をしねえものが、被服を着ては居られぬので、そツくり疊んで返上すると、あとは宿舍の二階から階下へも下りられぬといふ始末。　や、どんなもんだと、柱を押して、しこを踏んでも對手はなし、軍人ともあらうものが、鎧櫃の底を拂いて、もんなしは恥かしゝ、天窓を抱へて居た處を、辰之助は戰地へ行くので、これは、もう不用といふので、衣服を貸して呉れたでがすよ。

脱いで來たのは其の單衣。尤も、はじめから辰之助は、私に呉れるというたけんども、留守の身上が

身上ぢや、貰切りに着服する氣はねえだで、歸ると早々舊へ戻さうと思ひましたが。

私心ばかりでも、辰之助は何となく殺したくは思はぬだ。前方が其氣もないものを、私が手から、自然に着ものが返るやうになつては、是がもし記念になる前兆でゞもあつてはなンねえ。まあまあ、と考へてね。一日のばしにして居た處、昨夜の事、お前様。

例のそれ村長が、厭らしいことを云ひかけて、何でも、酒をくらつた擧句、引抱へか何うかした時に、後生です私と思つて、髪を買つて下さいましツて、お縫さんが言はしつたとね。錢はともかくもお前様、容色を賞翫の兀親仁だ。髪は惜がつて切らせずに、其場は濟んだげに言ふですがね。」

十

魚釣はしめやかに、「聞いたゞけでも、私痩せるやうな氣がしたゞ。髪を賣らうといふ切羽では、今度は生爪を剥ぐばかり。單衣一枚でも大層な足になる、縁起も不縁起も云うて居る處でないと、今朝來がけに脱いで來ました。お縫さんは手間とりに近間へ行つて居ましねえ。爺様は向うむきに呻きながら寝てござつて、寝返りするも大儀な様子。婆様は茄子のへたを、蔭干にしようとつて、絲に繋いでござつたがね。これの、辰兄に頼まれた、着物一枚返します。つい近所の事でがすで、まさか忙かつたとも、忘れたともいへぬもんだで、澄まぬことぢやが、だんまりで少時借用のしたでがす、面目次第もない始末、とすぐに裸體になつたがね、目が見えぬで仔細はねえだ。

口へ出しては言はつしやらぬが、私が戰地へ行かねえのが、どんなに羨しからうと思ふと、ものを言ふも切ないで、腰をかけ込んで餞舌つた處で、麥飯一杯世話をする力もなし、世辭を云ふだけ面目ない

と、逃げるやうにして來たでがすがね。
恁う云ふ譯だよ。
何お前様、此處等の田舎ぢや、今時裸體で野面を歩行くは當前のこんだでね、私帶を解くほどにも思はねえだよ。馬が綱なしに、のそり／＼放し飼に歩行く處だ。巡査に云うたは出鱈目だで、私にお氣遣は勿體ない。平によしてくれさつしやい。　だがね、此の包金子施さつしやる氣があるなら、今話したやうな譯でがすで、何うぞ何だよ、其小坂が許へ饗應うてやらつしやいやし。
高はどれだけか知んねえが、＜Ｒｕｂｙ一錢か二錢、づゝの頭をね、お縫さんが器用に結うて、それもある日もありや、ない日もある。おどんだ處を舅に進ぜて、上澄を吸ってつないで居る。花の露なら味はあれど、粥の薄さが似たゞけで、蝶々＜よりも果敢ない姉さん。半年の命はつなげませうでね、私頼むだ、何うだね。」　と薩張した氣象らしいに、くど／＼言ふのも我事ならず、他人を思ふ眞である。
旅の女は、犇々と引入れられた風情であつた。
「まあ、承れば承るほど、何とも申上げやうのない、お可哀相な、そして染々お優い方でございますねえ。

あの、其のお縫さんとかおつしやる方は、現在、此の先の村においでなさいますか。」「えゝ、居りますとも、お前さま、たゞ、花のしぼんで消えぬばかりで。」

旅の女は身を震はすまで。「可かつたこと。もし今のやうなお話を伺つて、そして其の方は、はや泣死にお亡んなすつたといふことだつたら、どんなに口惜しからうのに、眞個に世の中に儚いものは、一人ばかりではありませんね。」

魚釣いかさまといふ顔して、「然うすると、お前様も、」「否、私なぞは苦勞と申しても其のお方なぞと較べられるのではないんですが、でも、あの、不束な自分勝手の心では、まだ其のお方がお羨しいほど、情ないのでございますよ。」「其で御發心なさつたゞ、はて、さて。　お年紀少な、其のおからだで、よく／＼なことでなうてかい。いや、お歩行ひなさつた足のあとには、こんな燒原にも今度から、菫なり、桔梗なり、女郎花なり咲きませう。功徳になるで、どうぞ、小坂が許を見舞うておつかはしなさりまし、是は、此まゝお前様、」「其は然うしてお置きなすつて、貴下から其の方へお上げなさいま

せうとも、他におつかひなさいませうとも、可いやうになすつて下さい。

彼方へ參つて、私から別におしるしをいたしませうから。」

金子は爰に、と明けては言はぬが、袖をかへせば白銀黄金、立處に蝶となり、花となつて來たらむづ、神々しくも見えたりけり。

魚釣片手で包を頂き、「そんならお言に甘えまして、お預り申しますわ。恁う見た處は澁團扇を持たぬばかりの姿でがすがね、御利益を以て福の神となつて、私も小坂が門口から、ぱら／＼と撒くとしますだ。

處で、お待ちなさりまし。お前様、これから辨天様へ御參詣なさして、お縫いに逢う下さるには可いが、晩の泊のお心當りは？」「唯、お堂守に願ひまして、お通夜をさして頂きます。唯今までも彼方此方で、然ういたして參りました。」

事もなげに云ふのを聞き、夥度打頷き、「歸命頂禮、何よりな思召ぢや。堂守も何にも居らぬ祠でがすが、此頃は在方のものが交る／＼詰め合うて、それこそ平生は敵同士の法華も念佛も親類づきあひ、

一心になつて、皆、自在辨天に、敵國調伏の祈をして居りますので、あとで又私もお目にかゝりましよ。お送り申しても可いだけれど、立つて見さつしやつたばかりさへ、叱言ぬかした此の口で、追従らしうて極が悪いで、まゝ、づツとおいでなさりまし。ぢやが、近頃此の山の根ツこから野原へかけて、狂犬がをりますで、晝間は大抵出をりませぬが、氣をつけて行かつしやいまし。萬一な事があつたら、岸は淺いで、水の中へ入らつしやると、屹と飛つかねえだから、可いかね、誰も見ちや居らぬ處、裾をぐいとやらつしやいよ。」

十一

「追つけ私もお後から參りましよ。然うして、はあ、今夜お前様を頭に、お縫さんと私三ツ鐵軸で、祠に通夜をしますべい。其時さ、又お前様の身の上も聞かしてくれさつしやいよ。」

如何に、其の通夜の、清く美しく、哀であらう。湖のさゞ波も、然らむ時は嘸、天女が琵琶の絲に響いて、妙なる調を傳ふるであらうかを、深くおもひやつた口吻であつた。

旅の婦人も、正に其の然るべきを豫期したやうに、寂く微笑みつゝ頷いたのである。　けれども、約束はあだになつた。此の三人が、柳小島の辨財天の洞に未だ會せぬ内、魚釣は、二度目の召集に應じて、家にも歸らず、仙臺さして馳せ參ずることになつた。

其の順序は恁うである。

木川田は船のあたりを分れて行く、巡禮の後姿、後姿は唯女性の案山子を、野中に見るに過ぎないけれども、やゝ前下りに深く被つた、笠の間なる頸の雪、薄く煙つて艶かに濃い、髪のかゝりの洩るゝにつけ、先づ其の目鼻だちの如何ばかり、氣高く美し

きかをおもひ遣つて、怪しきまでに慄然とした。上目に仰げば磐梯山、下目に俯せば猪苗代。

其の湖べりを次第々々々々に、遠ざかれば猶花の香の、風は此方へ戰ぎ來て、馥郁として、四邊を籠め、峯の煙は中空を、逆にむら／＼と彼方に靡いて、紫の雲の路を描き、漣は靜に寄せ、飜つて、さら／＼と走つて、白銀の橋を渡し、ともに其の人を導く光景。

荒涼たる原野、塵埃を納めて、鶴の羽以て掃けるに似たり。

其の影見えずなり行きたるまで、諸膝に兩手を組んで、魚釣茫然として居たが、思はず獨言をいふ。

「はてな何だか餘り神々しいので、些とこりや不作法なやうで、眉毛に唾も附けかねるが、……はてな。昔の城の女妖が今時出て來るわけはなし、破裂の時の亡者にしては些と人格が高過ぎる。蜈蚣を射ろ、とも、鯰を切れ、とも、別に註文がない處ぢや、底におはします姫君でもないやうだ。然うかといつて、辨天様に知己があるぢやなし、はてな……」と船に差置かれた、金子の包を捻つて見て、ト日に透したが、小首を傾け、打案じた手はいつとなしに、

兩提の煙草入にかゝつたが、粉の中へ突込んで、引握るやうにして金具を留めた。柿を木彫の根附を掴んで、熟と考へたまゝ片膝を立てると、そろ／＼六尺に挾んだが、殆んど無意識。　はじめて心着いて、煙管を拾つて、唯切尖を檢す構、飲みさしの吸殼が、消えてこげりついたのを、舷へごつんと當てゝ、口をへの字形に、フツ。

持直して、身體をねぢりざまに、ぐいと、色も形も自然薯の如き筒につツ込み、振向いて、手拭を取つて又南瓜。

腕を伸ばして釣棹を手許へ引くと、水に線がついて、絲が寄るのを、尖からくる／＼と巻きつけたが、張合のない顔色。一寸肩に、ぬいと立つと、小造の仁王のやうな、筋のしまつた、脚の長い、屈強な其の丸裸で、のさりと胴の間を蹈み出すと、舳へ蜻蛉が來て留まつた。

船はふはりと浮いて、斜めに陸より高きこと三尺、木川田は陸へ上つた。

身内に引つけた丈短き、曠野の影を熟と見ながら、島に流されて年經た形で、悠々と歩行き出す、前方から、ぼた／＼と駈けて來て、足許に鳥が立つ、け

たゝましい、村の親仁。「やあ、猪三郎どん、此處にかい。」と呼吸せいたり。「佐次兵衞さんかね。」「おゝ、主は此處にかい、早、早く來てくれさつしやい。」

十二

「慌てまい、何でがす。何事がはだかつたよ。」

「猪三郎どん大變ぢや。」と顔も膽も見るから小さな其の目の色を變へて居る。親仁が状を左視右瞻。

「うむ、狂犬が出ましたか。然うぢやねえかね。はあ、それぢや途中で、綺麗な怪ものさ見さつしやつたか。何、ありや辨天様へお參詣に行くだとよ。心がけの可いお妖ぢや、些とも恐がらつしやるには當らねえだ。」「何いふぞい、狂犬もお妖も日中にや出はせぬが。又出た處で、恐しいというても自分の事ぢや。私が騒ぐのは、餘所の人の身の上だに。」

「はあ、誰ぞ、何うかしましたか。」「おいの、」と始めて息をつき、「爺様が許の嫁御の事ぢやわ。」「おゝ、お縫さん、」「其の女ぢや。」　ぎよつとして、「何うかしたかね。」「村長が許へ、引摺つて行かれたゞよ。」「引摺つて？」

木川田は目を〓つた。「何だつてね。」「叉厭らしいことを言ふだあよ。」「打棄つて置かつせえ。惡い病だと斷念めるだ。」と詮方なげに、兎も角も

安堵したが、自分も断念めたやうに云つて、足を踏留める勢もなさゝう。背後から押される形で、てく／＼と歩行き出す。

　佐次兵衛は引添うて、情ない上目づかひ、「猪三どん、猪三どん。」「…………・」「これよ、猪三郎どんてばな。」「やあ、」「主が然う氣なしでは誰が何う出來るものぢや。まあ、見ては居られんで、來てくれさいよ、何うかして遣らつしやい。」「仕方がねえよ。」「えゝ、これ仕方がねえちゆツて、主、見殺しにする氣かい。」「別に彼の村長だとて、お縫さんを取つて喰ひもしねえだあよ。」

　氣だるくいへば、急込んで、「主といふものは、これ、一層のこと、取つて喰や一思ひ、我等目を瞑つてお念佛ぢや。あとは地獄も極樂も、阿彌陀様まかせぢやでの、氣を揉んでも仕方がねえだが、煮ようか、燒かうか、酢で揉まうかと、食はぬ前を樂に、お縫姐さんをつかまへては、俎の上へ乗せて、庖丁で撫でまはしては、叉生洲へ放すのを、傍で見て居られるもんかな。

　今日は何と、晝日中さ、村長めが寝そべつて、太九郎の奴に、浪花節を唸らせて、姐さんは三味線弾

いて居るでねえか。
猪三どん、何とだよ。」「…………………」
「無言か、これえ、考へて見さつせい。
親兄弟にも棄てられるまで心中立をした男は、戰爭に出て留守なり、舅は一年半年と、腰も立たねえ煩ひなり、おまけに姑は目が見えぬ。これではお前、國主大名の御臺樣でも、大概いきついて了ふだに、啜るものは粥も六ケしい、五錢や六錢の髮結錢で、四人が其日ぐらしぢや。
軍書讀が三國志に、琴を弾ずる法はあれ、何と主、其の苦勞な中を、狒々や狼に取巻かれて、三味線が弾けるかよ、えゝ猪三。」「弾けぬ！」と大きく、藪から棒に云つて退けた、猪三の面は眞赤である。
「弾けまい、それを姐さんは弾いとるだよ。まだ／＼心配なことがあるだ。
豫て主も知る通り、私等これ交る／＼、辨天樣の祠に籠つて、敵國調伏の心願をかけて居るだね。
今日も朝から參つて居つたわ。村の喜六叟の、昨夜から隣村へ往つて居て、今朝疾に村方へ歸つたといふて祠へ駈込んで來たつけえ、顔色が好うないぢや。然しての、說ふことを聞かつせえ。」

十三

「主等アもつと一心に、信心せいではなんねえだ。豪いことが出來たぞ、と眞蒼になつて居るで、何を云はつしやる、百姓だつて何だつて、此万人等人間ともあらうものが、いかに暴れゝばとて、手に負へねえとて、狂犬の事なんぞ、神佛に御手數をかけてなるものかい。

喜六叟、私等が此の祠に立籠つて居ると云ふのは、其處に押立てた旗にも見さい。憚ンながら露西亞退治、敵國調伏の願がけだぞ。狂犬に咬まれましねえやうになんぞと、そないな小ぽけな了簡ではない哩と云ふとの。

何こきをる、誰が狂犬退散の、願ぢやと云うた、と力む。　はてさ、叟、主いま大變なことがはだかつたと云つけえ。ござる道で、唐黍の陰にでも、狂犬の尻尾を見たづらあ、と籠めたわい。

駄目を云ふもんでねえ、さては何にも知らぬげな、言うたら瞻玉がひつくりかへらう、耳を塞いで能う聞けよ。隣村の噂では、對馬の沖へ露西亞の鐵舶が顯はれて、こちの船べい大砲弾丸にあげをつたわ、兵隊さんが千人近く、中佐少佐のお方たち迄、討死を遊ばしたわ、何とぢやい！　ひやあ、と私等、上

敷の外へ腰を抜いたが。　やあ、猪三どん、眞個の事ぢやげな。」

猪三は釣棹を擔いだまゝ、俯向いたまゝ頷いて、「そんな事もあるげだよ。」「滅多無性な話ぢやないかの。　それにの、未だ憂慮なことゝ云ふのは、隣村の佐吉どんぢや。主だの、小坂だのと一緒に召集されて、彼は戰地へ向つたぢやが、丁どの、若松の親類から、喜六叟の往つて居た所へさして、對馬沖大變の音信があつた所へ、佐吉どんの手紙がの、廣島から届いたゞ。　いよ／＼運送船、××丸へさ乗組んで、戰地に向けて出發だ。隣村月の輪の戰友、小坂辰之助どのも、同船にてござ候とあつたとい。やあ、是れ敵艦に沈められたは、船もあらうに××丸ぢや、助かつたものも些とはある。未だ其の名は分らぬが、船も人も藻屑となつたで、十に一は助からぬ、佐吉は的切南無阿禰陀、と沸えるやうな騒ぎでの、昨夜は一村まるで寝ず、私もおち／＼寝ぬのぢや、と喜六叟は目を赤うして、隣村は隣村、此方の辰之助も危い。もしもの事があつた日にや、小坂の爺様や婆様は何とならう。第一貞女な、孝心な、あのお縫さんの顔が最う情なうて見られぬで、朝飯

を食ふ元氣もない、と、其まんま板敷の上へ轉げ込んで、苦い顔をしながら、鼾をかいて切歯ぢや。五人居た同志の講中、寝像の惡い喜六叟を取巻いて、唯出るものは溜息ばかり。

其の内に停車場へでも走つて、對馬沖の様子を聞かうと、駈出したものもあり、氣が抜けて茫乎として、内へ歸つたものもあるだよ。

火は消える、茶は冷える。口イ利くにも張合がないで、湯でも沸せと、一人が土瓶の下を吹くと、一人は清水を汲みに出た。私は、しようことなしに鉦を叩いて、悄乎と拝んで居たわ。

此處へ何と、お縫どのが、あの五つになつた小兒を負うての、束髪ぢや、頬へはら／＼風が吹くのを、小兒が煩からうと拂ひ／＼よ、眉を落してくすぼつても、判然と色が白く、窶れりや窶れたで美いぞ。小さな日の丸の旗をくる／＼と廻して見せながら、肩越に振返つちや、あやし／＼、いそがしさうに冷飯草履で、ぴた／＼拝みにござつたが。

顔を見ると此處が一杯。」　と、はだかつた胸を横に撫で、「南無三寶、蟲が知らせて、様子を勘附いたと云ふではないか。又疾くに、・・・・丸の、

風説を聴いてぢやと、尚難儀。　これ／＼でござりますさうな、良人は無事でございませうか、とそれ尋ねられてゞも見たが可い。はあ、何というて返事をすべい、こんな時は、寝て居る喜六叟が羨しい、と思ふとの。

誰の心も同一ぢや、土瓶の下を吹いてござつたのが、火箸を杖に、こつくり／＼。」

佐次兵衛眞似をして、澁い顔。

十四

「可か、居睡をはじめたゞ。水を汲みに行つたのは、と横目で外を見ると、其の親仁もぬかるものか、松の樹の下の、しよろ／／流を、土瓶に汲んだり、溢したり、底の方を洗うて見たり、落葉を掻除けて見たりしての、づツと向うで背後向に納涼んでござつて、急には歸りさうな樣子もない。　さしづめ、私が對手ぢやで、皆さん御苦勞さまでございます、と判然口を利かつしやるのも、底に涙がある所為か、ひや／／と頸に沁むわい。

　鉦を矢鱈にカンカンカン／／、柳小島は寂として、他に誰も人は居ず、一人が寝そべつて、一人が居ねむり、清水の傍には一人が踞んで、私が鉦を叩いた所は、湖のへりの仙人か、羅漢の缺に魂が入つたか、辨天樣の御住居へ、庚申樣のお猿が四疋で、店借をした體ぢやての。

　狐格子を開いた下の、敷居際に膝を折つて、しばらく拝んで居さしつた。

　寝そべつたのに遠慮の氣か、姐さんは小さな聲で、爺さん、爺さんと私を呼ぶぢや。　そりやござツた

と、どつきりしたゞ。慌てゝ三本毛を抜かうにも、天窓は兀げたり、猿にならず。見まい、聞くまい、餞舌るまいで、澄まして居ることもなんねえで、おゝ、小坂の姐さんか、ござらつせえ、と云ふ口の下からの、密と、顔を視めたて。

可いお天氣でございますねえ、皆様のお氣張で、戰もおめでたう存じます、とたとへにいふ、白魚のやうな指を揃へて、丁と挨拶をさつしやるで、先づ此の處大丈夫ちや。對馬の難も、辰之助が其船に乘つたことも、未だ知らぬやうに見えたので、一寸のがれに一呼吸ついて、それから爺様の容體や、婆様の氣の毒さ、あゝの恁うの、と二ツ三ツ觸らぬ話をして居るとの。

民太郎といふ小兒がよ。　うつとりした神々〳〵しい、柳小島のお姫様の、まをし兒でゞもあるやうな、色の白い顔を仰向けての、御像を見て居たつけが、線香を取つて、そら、睡の狸の火鉢から火をつけて、姐さんの顔を見て、莞爾するとの、線香立にさしたと思へ。ちよこなんと胡坐をして、練物のやうな膝を立てたわ、鉦を一ツ、カーンとやつた。

何事ぢや、お供物の團子でも狙ふ事か、と私思は

ず涙が出た。

此の面との、小兒の顔とを見較べて、姐さんがよ、黙つて俯向いて居さしたけえ、漸と彼方此方〓すと、狸も、猪も、松蔭の狐も其のまゝぢや。　をぢさん、皆様のいらつしやいます前では、餘り身勝手で、申上げられた義理ではございませんが、どうぞ、御祈念を遊ばす序に、辰之助が討死をしませぬやう、無事で戻つて來ますやうに、お願ひなすつて下さいまし。親兄に負きました、いたづらの私だけでは、辨天様のお心も、どうやら料りかねます、と然う云うての。ほろ／＼とお前、何ぞの花へ、露がかゝつたやうに、涙を落したではあるまいか。

何と我慢がならうぞい。狸もむツくり、猪も起きた。清水の狐も飛んで來た。此の猿松も手を取つて背中をさする、肩を撫でる、小兒を抱くやら、賺すやら。えゝ、何をつけ、おかみには、大将もある、、兵士もある、艦も鐵砲も立派にあるわ。片田舎の此方人等が、何を知つて戰ごとに、嘴を入れうぞい。一人の無事は十人の無事、百人の無事は千人の無事、千人の勝は國の勝ぢや。皆が寄つて所願を籠むるは、此方様たちの可愛さに、辰之助の無事を祈るのぢや、

と皆が泣くやら、悄氣るやらの。姐さんを中に取巻いて、身體に雨を降らせたぞい。　おい、猪三どん、主も泣くか、」　と佐次兵衞は目をしばたゝき、「然うする處へ、何と、聞かつしやい。小島に立てた旗の下へ、ぬいと立つて、尻を捻つて、鼻の先きに頬被よ。三尺帶の前はだけ、表打の下駄を突掛け、厭らしい風俗でな、うそ／＼御堂を透したのが、我が折れ蝮の太九郎野郎ぢや。」

十五

「はれやれ、見たくでもないと思うたが、殺さぬ内は居る奴ぢや。やがて、のそ／＼と遣つて來をつて、何と、勿體ないことではないかい。高くもない縁側ぢや、片足御堂に踏掛けて、口を歪めて覗きくさる。眞先に目につくのは、彼のふちの黒い盗人眼よ。お縫さん／＼、一寸顔を貸してくれさい、些と急な用があつて、一遍其處等を尋ねました、さあ直ぐに、と急き立てをる。

姐さんも行きたくなし、私等も遣りたくはないに因つて、目眞似や仕方で留めるばかり。相手は力づくで引立てもしかねぬ奴。

又それでなうてからが、爺様も婆様もあれば、居切になつて、辨天様のお附の木像に成澄ますといふ法ではないわい、唯今ります、と直ぐに民太をおんぶして、悄々と出さつしやる。　さあ、急ぎねえ／＼と、私等には會釋もせず、忙しさうに前へ立つて、裾ををくるり、半分が處尻をむいて、藪蚊か蛇にでも螫されたか、毛だらけな太股をごり／＼と掻きながら、じろりと見返つて連れ出したわ。

此奴と一緒にや民太も厭か、あの、三日月の中へ髯題目書き込んだ、大旗の下の處で、おんぶをされた背中から、いたいけな手を出して、旗竿をつかまへて、駄々を捏ねて動かぬぢや。

姐さんも引留められて、しばらく旗の、磐梯おろしに靡くのを、熟と仰向いて見てござつた。えゝ、何を路草喰ふのぢやい、と堂まで聞える大聲で、太九郎めが怒鳴りくさると、怯えて、わつと泣きだす民太の、手を〓ぎ放して、しよ引き居つた。

何をするか黙つて居られぬ。私が遠くからあとについて、様子を見に出たのぢやが、それ、今いふ通り、村長が許へ連込んで、とう／＼三味線を引かせるのを、裏の藪から覗いて來た。

何と又太九郎めが、狒々親仁のしみつたれに、幾干貰うて為る事やら、其語り居る浪花節がの、小栗判官照天姫や、山荘太夫の段ではない、事細には參らねども、雑と陳べます段の儀は、惚れた男の胸の内と、あの畜生、兀天窓の代理をして、拍子にかゝつて口説き居る。　六十男の事なれば、氣立がようて、しんせつで、掻い所へ手が届く、などとやるとの、兀旦那が、でれりとして、あ、よいや／＼と囃

すぢやないかい。見ても聞いても居られる事か。優い民太はの、阿母が泣き／＼三味を弾く、痩せた膝に突伏して、重ね手に顔をのツけて居るぞい。何と、此の眞晝間、まさかに手籠にするでもなし、今はじまつた事ぢやないが、朝の御堂の様子もあり、不斷から堪へ堪へて、黙つて居たのが最うならぬ。　おのれ此の、裏庭の崖藪から、鵯越の逆落しで、埴生村の清盛の、藥罐首抜いてくりよと、な、思ふばかりで私ぢや明かぬ。夢中で駈廻るやうにして、猪三どん。其處で主を捜したのぢや、これ、猪三どん。や、主、背後を向いて何處さ行く。」　と心着いて變な顔。竝んで歩行いた猪三郎は、此時埴生村近くなつて、唯見れば肩を合はせながら、舊來た路の方に向をかへて、在所に背中を見せるのであつた。

木川田は目に涙一杯。「佐次兵衞さん、私又釣に行くだよ。」「何ぢやと、」「迚も同一村に居て、お縫さんのいぢらしさを、私見ては居られんで、舊の船へ出掛けるだよ。」と早や、つか／＼と踵を返した。

驚いて、慌てゝ、壓へ、「これ、やい／＼主が釣に行きや、姐さんの身が抜けるかい、鰡や、釣の土

産(げ)もので、料簡換(れうけんか)へる兀(はげ)ではないが。」小(ちひ)さな親仁(おやぢ)を腰(こし)に縋(すが)らせ、山(やま)を望(のぞ)んですツくと立(た)つた。猪三郎(ゐさぶらう)は動(うご)かむともせず。「けんどもね、仕方(しかた)がないだ。」

十六

「仕方がないで濟まされるか。えゝ、猪三どん、主は第一媒妁人ぢやぞ。」

木川田の脚は根から揺めき、「や、それ言はれてはなんねえだ。」「見さつしやい、黙つては居られぬ處ぢや、喃。あの爺さまが、婆さまが、姐さんが、民太が、」　と口早に云ふと、身震ひして、「えゝ、それ聞かされちや溜らねえ、理解で分る對手でなしだ。私が飛込みや喧嘩になつて、太九の蝮や村長めに、疵でもつけずにや納まらないわ！」と二ツ三ツ地蹈鞴ふむ。

佐次兵衞齒がゆさうに勇み立ち、　「主に似合はず、何をうじ／＼するのぢやい。傷ぐらゐ愚な事ぢや、太九が土性骨踏折つて、埴生村々長が首引抜いてくれい、やい！　こゝな隊長め。」

聞くより大息に肩を揺り、　「私、私が身體は露西亞が對手だ。一人や二人を向うへまはして、ひゞツたけでも入らしては、從軍が出來なくなる。我が身もみまゝにやならぬわ、最う堪らぬ、爺々、堪忍さつせえよ。」　といひ棄てゝ振切つた、魚釣は一

目散、村を見棄てゝ駈出すあとから、轉がるやうに追つかけて、佐次兵衞が又武者ぶりついたは、足疾く續き得たものではなく、木川田が何とかしけむ、不圖其の歩を留めたのである。

叉縋つたのを振も拂はず、「おゝ、爺々、ありや、爺々が許の白馬ではないか。」

此のあたり村に近く、湖の岸にやゝ距り、耶摩の岩山に相接して、野中を北寄りの崕の下、井戸側蒼く苔蒸して、玉清水を湛へたる、傍に古き建札して、龍神の水といへるあり。

此の清水、昔より汲めども盡きず、溢れもやらず、長に鏡をかけて、柳小島の月一輪。雨に濁らず、雲に隱れず、唯長旱に湖心の水、其高さ三尺を減ずる時は、水晶一分の厚さを削らる。

故に猪苗代の龍神こゝに宿ると稱へて、然も冷冽氷に似たり。

巖を絞るにあらずと雖も、此の冷さに四邊の岩山、膚に粟立ち、露したゝり、一面に薄く草の生ふるが見ゆ。

然れば硫黄の煙黄に、土赤く、熱砂湖面を吹いて水の黒き時は、建札清く、草緑に、玲瓏として澄み

渡り、山紫に、野は蒼く、千里一碧拭をかけて、木の葉の他に塵なき時は、却つて陰暗く、水曇りて、小雨そぼ降る眺望がある。

時に此靈水に、鬣を颯と垂れて、悠々と飲む一頭の白馬があつた。

鞍は固より一絲をかけず、鶴の姿の四足の雪。

「おゝ、似ては居るがの、違ふやうぢや。」「然ういや、交毛がないやうだ。」

折から空良く晴れたれば、水精恰も霧の如く、清水を蔽うた駒の背後に、朦朧として女の姿。しとやかに手を擧げて、此方を招く風情である、と見直せば麾く。

木川田は思はず胸轟き、「爺々、一緒に來さつせえ。」

足早に二人して、船なき湖を渡るが如く、眼に遮る樹立もない、野を斜めに横切つて、龍神の水に近づけば、微妙き風一陣、さつと鬣を吹くよと見るや、木川田は明に、前刻の旅の女の、月の顔、黒髪涼しく、小笠を手にして端然と其處に彳むのを發見したのである。「や、お前様は！」「前刻は。……途

中で村の衆のお話に、捨小舟に魚釣る人は、騎兵でおいでなさると聞きました。

然して、つい今しがた、急に又、貴下の召集令が下つたさうで、急いで迎ひの支度を、とお騒ぎのやうに見受けましたから、かりそめではありますが、お知己になつたお方、早くお知らせ申さうと存じまして、引返して参りました。」

木川田は、滿面に意氣溢れて、「召集令が、や、そりや眞個？」「誰が、こんなことを言つて遊ひませう。」「えゝ、難有いぞ、いや、こりや何うぢやい、」と握拳を下げたり上げたり。

微笑ながら打視めて、「それから、貴下、丁ど猪苗代の馬市へ持つて行くといふ、博勞が、此の馬を持つて居りましたから、御國のための御首途、心ばかりのお贐に、此を貴下に差上げます。贈物にはお恥しいが、駒は千里の駿足らしい。直ぐに召して、づツとおいで遊ばしまし。汽車より早う、仙臺へお着きなさいますよ。而して戰場でも、何處までも、何時も貴下の召すやうに、私が祈つて上げますから、」　と鷹揚ながら物優い、其の風采を、物越を、呆氣に取られて瞻むる脚を、下からぐい／＼と引張

るのは、此の美人を一目見るより、其まゝ大地に領伏して、わなゝきながら口の裡に、唯、辨財天女の御名を唱へた、佐次兵衛の叟であつた。

　木川田心着いて諸膝支いたが、「は、は、は、何と申しやうもござりませぬ。が、貴女様は？」

「名を申しては、何となく、恩を被せますやうですが、貴下にものを差上げますのに、氏素性も申さないと、お心持が悪いでせう、鬣に結はへたものに、一寸記して置きました、後で御覧なさいまし。さあ、早くお馬に召した、勇ましい姿が見たい。」「：：：：：：：・、」「御遠慮なく。」と裳をあとへ、靜に身を引いてのたまへども、木川田は猶豫へり。「：：：：：：：：。」

屹と見て、「どうかしたのでございますか。」

「えゝ、村、村、村方に、お縫と云ふものが居ります、」と云ひながら、轡頭を上げようと、清水を覗いた猪三郎。「何にも云ふな、勿體ないぞ。」と顔を擡げた佐次兵衛も、齊く同音に、あ、と叫んだ。

魚釣は水の中に、老いたる博労は蹄の下に、渠は銜へられた埴生村の村長の首を、此は蹈躙られた太九郎の躯を、幻に認めたのである。天女は最早見え

たまはず。

駒の轡を引向けて、湖水に緑の滴りたる、柳小島の方にして、片手を丁と拝手に、顋の下に遙拝し、

「許させたよへ。」　と飜然と乗れば、英姿忽ち爽に、唯鞍壷に刻よれたる、第二師團に名譽の騎兵、駒は紳與の駿足なり。心靜に蹄を刻んで、「這奴！爺々、武運のほどもおもしろ哉。」　と馬上に莞爾と打笑むや、釣棹を鞭に取直し、ハーオとばかりに十里の曠野を、早調子で輪乗りをかくれば、合掌を解いて腰のあたりに、背手を組んで、ほく／＼視むる、佐次兵衛の右の袖より、白き虹、衝と湧いて、湖のへりをかけ、磐梯の麓に迫つて、左の袖へぐる／＼／＼。

雪に旭の照添、ふ色艶、三度にして乗鎮めた。垂々／＼と汗になる膚も、龍神の水をかひたるぞや（珠玉を聯ねてかけたる如く、星をつらぬいて飾れる装。

洵や、柳小島の辨財天は、遠き昔、元和の頃、孝子が鯉を捕ふる網より赫耀として出現あり、御姿の端嚴典麗なる、海潮妙音に肖させたよへど、本地は月天子にて渡らせ給ふ。　されば帷幕の模様にも、旗にも、三日月を描くにこそ。猪苗代の渺々／＼たる、

磐梯山の巌唆なる、硫黄の煙立籠めて、荒野の光景夜の如く、月の世界に似たるかな。

白馬は嘶くこと一聲す。

木川田は心着いて、其の鬣を掻撫でると、小さき紙の切端か、元結のやうに結んであつた。

押頂いて披き見れば、鉛筆の女文字、はしり書美く、旅順口第一次閉塞の時、戦死、海軍少尉××が許嫁の妻、××艮人の追福修行のため、諸国巡禮の途次これをまゐらす。

柳小島にて、と讀まれたのである。

【完】